

山間地過疎集落に生きる外部移住者の生活適応に関する研究

－田辺市龍神村の中国人移住者を事例として－

劉 慧瑾

キーワード：過疎集落、移住者、定住、環境適応、地域活動

1. 研究背景と目的

近年、日本の農山村においては、人口減少と人口構成の高齢化が急速に進んでいる。こうした農山村の中でも末端集落から消滅が始まり、次々と集落が消滅する可能性があるといわれている。こうした状態を生み出さないようにするために、都市住民と農山村住民との相互の交流を通じた農山村地域の活性化やUターン・Iターン移住者の受け入れなどが模索されてきた。

今までの定住促進政策やその取り組みなどは移住前に主眼をおいたものが多かった。しかし、移住とは、移住者と住民による持続的なコミュニケーションである。本論文調査の主な内容は、和歌山県田辺市に移住し三年間住んでいる中国人のお嫁・Kさんを事例とし、彼女への聞き取り調査と彼女が住んでいた地域でのヒアリング調査を通して、実際に移住者の日常生活と入居後生活適応過程を観察し、地域への溶け込みにおける問題点を考察することである。

2 調査方法と対象の概況

地域住民と調査対象へのヒアリング調査と生活の観察を中心に行った。H地域は多くの中山間地域同様、地域経済は不振で、人口が一貫して減少し続けており、高齢化率も45.7%と高い。そこで住んでいるKさんは30代で、主人とその両親及び子供一人5人で生活している。地域は過疎化が進んでいる伝統的な日本農村であり、そこは彼女の以前の生活環境と大きな差異がみられた。そのため、心理上と生活上の息苦しさは余儀なく生じた。

3.調査結果

Kさんは中国人なので、言葉と文化の障壁がより厳しいが、地域への溶け込みはうまくできた。それは、地域人の暖かい受け入れ、家族の協力と本人の積極的な態度があったからである。

生活適応については、地域の生活様式には慣れてきたけど、地域には若者が少ないという現実があり、寂しい思いは避けられない。

4.結論

Kさんは、終に生活上の困難を克服し、地域への溶け込むことができた。ここで、Kさんが「地域のお嫁」として認められたことは、家族という「血縁」のつながりが重要であるといえる。また、Kさんの事例は移住者が地域での定住と適応の過程には移住する覚悟が必要であることを証明した。